

財団だより

# 多摩川

1994.6 第62号



カマツカ（コイ科）  
中流～下流の流れのゆるやかな  
砂礫底に住む。



魚道が整備された四谷本宿堰（1994年4月撮）

## ■多摩川現風景■

### ⑱ 魚ののぼりやすい魚道づくり

建設省が進める「多自然型川づくりモデル事業」は多摩川でもいくつかの施行例が見られるようになってきた。その流れをくむものとして平成5年度に「魚ののぼりやすい魚道づくりモデル事業」が全国に先駆けて多摩川の四谷本宿堰で竣工した。

多摩川を横断する農業用水堰には魚道のない所が多く、最近東京都水産試験所が確認した天然アユのせっかくの溯上も、そのため上流まで行けないとの指摘があった。

魚道はさまざまな種類のものがあって、魚の種ごとにその構造は異なるとさえ言われている。従ってこの魚道がどういう効果を発揮するか、しっかりした追跡調査が待たれる。

### ●関連する財団の助成研究（No.は報告書番号） 〈学術研究〉

#### ①「多摩川の漁撈文化史」に関する研究

1994年 安齋忠雄（研究中）

#### ②多摩川流域における魚類民俗学に関する研究

1992年～秋篠宮文仁（研究中）

### 〈一般研究〉

#### ①多摩川水系の近世漁業関係史料の収集と考察

1988年 宮田 満 福生市教育委員会（No.56）

#### ②多摩川における組合漁業の歴史的考察

1994年 宮田 満 福生市教育委員会

（今年度発行予定）

## 多摩川散歩

### ●多摩川源流

二松学舎大学 小野 香 鈴

私は、多摩川の下流しか知らなかった。多摩川の一斉清掃に参加し、ゴミの多さと濁った水に落胆していた。

多摩川の源流はどこだろう。奥多摩のあたりだろうと勝手に想像していた私に、多摩川の源流を知る機会が訪れた。

全長138kmの多摩川は、山梨県塩山市笠取山を水源としている。中央自動車道上野原インターから1時間弱で北都留郡小菅村に入る。「やまめの里」と銘打ち、奥多摩湖の上流に位置する小さな村だ。

長作観音堂から間もなく、村の中心部を流れている小菅川に出会う。この村の5月は、東京より1ヵ月遅れの桜の花と同時につつじや藤の花が咲き乱れる。山の新緑にも良く映え、美しい季節だ。この村の特産物の中には、清流を利用したわさびやイワナ・ヤマメ等がある。川沿いには養魚場やキャンプ場があり、アウトドアブームとも重なって、カラフルなテントや若者の姿が目立つ。

お隣は、丹波山村だ。丹波山村と小菅村の森林は水源涵養林として東京都水道局に管理されている。豊かな森林がたっぷりと雨水を吸収し、丹波川・小菅川となって奥多摩湖へ注がれる。丹波川から水源林の間を縫うようにして一ノ瀬川が続く。一ノ瀬橋を渡るとおいらん淵がある。その深い淵を見下ろすと、美しさに感動しながらも、多くのおいらんが命を失ったという悲しい過去を考えさせられる。

多摩川源流を目指して犬切峠から歩きはじめる。林道から見える木々の枝に、こんもりとした固まりがあるのに気がついた。ヤドリギだ。

笠取山は標高1953mの山だ。周りには2000m級の山が連なっている。山に入ってしばらくは木に取り付けられた巣箱が目につく。

途中にある流れに安らぎながら、鬱蒼とした闊

葉樹の道を行く。両脇に広がる森林は、足を踏み込むのをためらわせる程奥深い。水源林と呼ぶにふさわしく、散り積もった木の葉がふかふかのじゅうたんとなり、スポンジのように水を吸い込む。歩く人にとってもクッション代わりになり、負担を軽くしている。

当たり前のことなのだが、山を登れば登る程水が澄んでくる。その冷たい水を手ですくって飲む。私の抱いていた多摩川の印象を一掃するようなおいしさだ。

途中の水流で疲れを癒しながら2時間弱で笠取小屋に着く。一息ついてから水干に向かう。

水干は、1865mと笠取山の山頂に近い。小屋からは30分程でいける。多摩川の源流を求めてやっとたどり着いた水干だが、残念なことに涸れていた。ゴツゴツとした花崗岩の隙間からは一滴の水も滴っていなかった。

水干の上に水神社がある。急な崖を登ると石の祠がある。水干から水が流れ出ているのは見ることができなかったが、水神社まで登ってきたことで多摩川の源を見届けたような気分だった。

帰りは早い。苦労して登った道をどんどん下っていく。最後に、思い残すことのないように多摩川源流の水を飲んだ。

### 案内図





東京農業大学第一高等学校 長谷川 武宏

「今回、多摩川を歩いてみて、私たちの家庭からでる使用済みの水がいかに川を汚しているかわかった。これからは、お米のとぎ汁などは植物にあげるなどして川を汚さないように努力したい。(要約) これはちょうど、1年ほど前に私たちの会で行った「多摩川を歩こう」という企画に参加したある人の感想文です。2日間で羽村の堰から六郷橋まで、電車と足で見て回ろうと言う実に若さを過信した企画であったため、すべての感想の冒頭に「疲れた」と言う文字が輝いていたのですが、それでもさすが環境問題に興味のある若者達と言うだけあって、こんな感想がありました。

考えてみると、私たちはふだん生活している中で水というものは、ほとんど空気のような物になっています。蛇口をひねれば澄んだ水が流れだし、その水をまさに湯水のごとく使い、しまいには排水口に「使用済みの水」として流れていくのです。その水が、どこでどうやって処理され(されない場合も含めて)どこに流れて行くのかを余り生活の中で意識したことはないでしょう。むしろ、上水道=飲める水、下水道=汚い水、川の水=飲めない水と完全に分離して考えているのが一般的です。ましては、上水道の水源を守るためにどんなドラマがあったかなど考えて水を飲む人は、都会のような環境では少ないのではないかと思います。

しかし、これが田舎にいくと少し話が違ってきます。私は以前に、新潟の山奥に山村留学をしていた事がありました。ある夏の日の事でした。私は農家のおじさんにつれられて「鼻毛の池」と言うところに行きました。なんだか汚らしい名前ですが決して汚い池でないどころか

私たちの住んでいる集落の水源となっているところです。そこで、私たちの農家のおじさんは下の集落に水が流れるよう取水口の位置を湖の水位に合わせて調節していたのです。と言っても農家のおじさんは、水道局の人と言うわけではありません。水源と言ってもその下にぶら下がっている家庭も「山村」というだけあって大した数ではないので、当然都会で言う「水道局の人」もせいぜい1人いてときどき水源を見に行っていればそれでいいのです。しかし、それがその集落に住んでいる人みんなにある一定の周期で「当番」として回ってくるのですから、

当然みんなが水源地に少なくとも1回は足を運ばなくてはならないのです。すると、「鼻毛の池」と言うぐらいですから実に小さい水源です。夏になるとほとんど水がなくなってしまう事もよくあります。その光景を集落の人がみんな体験するのですから、「節水」と言う事を自然に心がけますし、木を切るときや農薬を撒くときでも「ここは水源に近いから」ということがほぼ習慣的に行動の中に現れてきます。ましては、水源地に行って「ゴミを投げ捨てる」様な人は、村八分にされるでしょう。つまり、田舎の人にとって水源地は生活の一部なのです。

考えてみると、多摩川は、鼻毛の池とは規模が余りにも違いますが、それでも私たちの大切な水源の一つです。しかし、私たちの多くはそれを見た事ありません。それだけ水源は、私たちの生活から遠く別世界になってしまっているのです。

今回訪ねた多摩川の源流には、豊富な緑と冷たくて透き通った水がありました。そこから流れ出す水はやがて多摩川という大きな流れになって下流に住む私たちを潤し、命を支えます。しかもそこには、水を守るために木を植え森を育て守っている人々のドラマやおしめない努力があるのです。しかし、下流にすむ私たちはそのことについての知識や経験が余りにも乏しいのではないのでしょうか。つまり、川はつながっているのに水を作る人と使う人に意識が分断されているという事実です。

今回、多摩川の源流を訪ねてそこにある森やドラマに少しでも触れて、普段当たり前のように水道の蛇口から流れ出す水にあらためて深く関心を持ち、また、その「当たり前」を考え直す事ができました。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

## ■ 矢川を行く

三 省 道 山 道 省 三  
 財 団 環 境 浄 化 東 武 南 武 山 道 省 三  
 研 究 員 客 員 財 団 東 武 南 武 山 道 省 三

JR南武線矢川駅から西へ約1km。畑や民家の点在する中にひととき目立つ緑地がある。東京都が指定した「矢川緑地保全地区」約2.1haの、池と水路のある湿地である。矢川はこの立川段丘崖から湧き出す湧水を水源として流れる約1.5kmの小川である。流末は府中用水の枝堀に流れ込み、やがて多摩川に至る。水源を辿っていくと、緑川という都市排水路にぶつかり、その川底を交差して龍神の池のある矢川辯才天（川の神）に至り、さらに上流へと連なるが道路による暗渠となっている。それでも段丘崖に沿って流れているためか、水質が良い。

矢川は、古くは谷川とも呼ばれていたが、豊富な湧水を集めて、矢のように流れることからその名がつけられたとされる（川沿いの案内板より）。

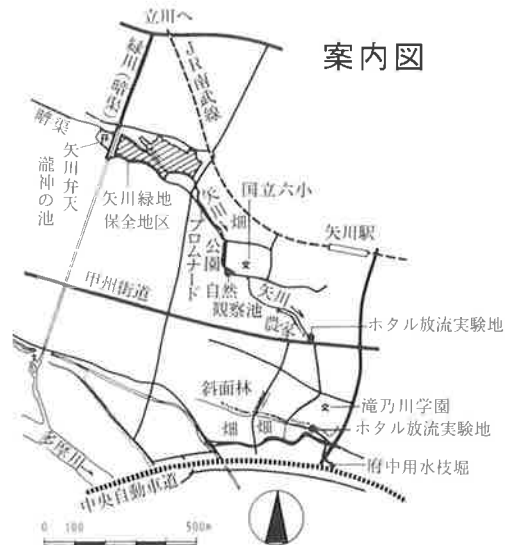
このような小さな川にとって、水源が市街化されることは川の死を意味するが、水源が保全されたことは大変意味深い。4～5年前、地元の住民団体の人たちと歩いたことがあるが、その当時はまだ本当に野の川の風情を持っていた。現在、国立市によって川沿いが甲州街道と交差する地点までの約600mがプロムナードとして整備されてい

る。それにしても、せっかくの湧水を集めた野の川の風情を、どうして固い構造にしなければならないのだろう。土手で草の管理や路肩が崩れ易いというのなら、市と市民で協力して普請するような仕組みを作っていったらどうだろう。国立第六小学校脇には水路から水を引き入れ「自然観察園」が設けられているが、矢川全体を知ってもらい、その恩恵としての自然観察園であるべきで、放流されているコイの群れにしても、どうもチグハグな感じがする。源流から甲州街道間は、まだ農地への水の取り入れや農家の洗い場、市民によるホタルの生育実験場などがあり、矢川は歴史や文化の痕跡、新しい市民との関わりあいのきざしが見える。そうした市民との関係が見える川はとても心地良いものである。そういう意味でもう一步踏み込んだ川づくりの発想を考えて欲しいような気がする。

甲州街道を横断した矢川は、やがて滝野川学園の校内に入る。うっそうとした雑木林の中を流れて斜面を下り、府中用水の枝堀に合流するあたりは、多摩川の沖積地で、水田や梨畑が広がる。多摩川の中流部にまだこんな農景観があったのかとホッとするような所だ。矢川は、崖線に沿って下る流れと用水への水路に分かれ、やがて双方ともかんがい用水で満々となった府中用水へと合流していく。



矢川の源流、右が辯才天、正面が緑川の堤防



## 財団からのお知らせ

### 〈平成6年度研究助成選考結果〉

去る3月16日第36回定時選考委員会を開催し、平成6年度の研究課題の選考を行い、学術研究5件、一般研究8件が採用されました。研究課題は次のとおりです。

研 究 課 題	代表研究者	所 属
<b>(学術研究)</b>		
●多摩川上流域の肉食菌類の分布調査	犀 川 政 稔	東京学芸大学 教育学部 助教授
●多摩川中～上流涵養域の浚流水中無機窒素濃度の地理的分布と窒素循環	楊 宗 興	東京農工大学 農学部 助手
●多摩川流域における水生植物の水質浄化機能の評価とその強化手法	細 見 正 明	東京農工大学 工学部 助教授
●窒素安定同位体比法を用いた多摩川の窒素汚染と浄化作用に関する研究	熊 澤 喜久雄	東京農業大学 教授
●多摩川河川水の発泡特性の分布と変化に関する研究 -20年前との比較-	安 部 喜 也	東京農工大学 農学部 教授
<b>(一般研究)</b>		
●多摩川の支流平井川における湧水と雑排水流入状況の住民による調査と水環境との関連性の検討	小 山 睦 子	府中市立第6中学校 講師
●多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究	久保田 繁 男	西多摩昆虫同好会 代表
●国分寺崖線の総合的環境保全のための市民提案型広域行政施策に関する調査・研究	金 子 博	みずとみどり研究会 会員
●多摩川の河川清掃についての歴史と一斉清掃の実施による参加者の意識と散乱ゴミの実態についての調査	小 島 あずさ	多摩川クリーンエイド事務局 代表
●水草から見た矢川の保全について	高 橋 福 子	矢川水質調査会 代表
●多摩川流域及び多摩地域が抱える、自然環境保全(河川、水路、丘陵等)の課題と住民活動の実態調査	榎 本 正 邦	せたがや村ネットYUI 代表
●多摩川流域のオオタカの生息状況の実態調査とその保護策に関する調査・研究	尾 崎 洋	東京オオタカ保護連絡会 会員
●多摩川における青少年のあそびと環境教育の研究-次世代の多摩川の守り手を育てる-	千 葉 勝 吾	東京都立田園調布高等学校 教諭

### 〈多摩川'94の発刊について〉

#### 〈総集編〉

今年は財団設立20周年記念号として「多摩川の新たな貌をめざして!」をテーマに編集しました。

多摩川の20年を振り返るとともに、多摩川の将来について関係者の方々からの意見を掲載いたしました。

#### 〈資料編〉

昨年の多摩川'93の資料編の継続で「多摩川と

生活」をテーマに、流域の民俗、産業、生活に関わる文献資料を整理収録しました。

#### 〈多摩川の概要(ミニ・データブック)〉

多摩川について分り易く紹介したガイドブックです。多摩川への入門書としてご利用下さい。

尚、多摩川シリーズは本号を持って休刊致します。入手法等については財団事務局までご連絡下さい。

### 〈映写会のお知らせ〉

日時 6月11日(土)第1部「あらかわ」開場12時

第2部「水からの速達」開場13時50分

会場 小金井市公会堂ホール(☎0423-83-1134)

主催 水の映像フォーラム実行委員会

☎ 0423-84-6827 FAX 0423-84-2000

詳細は主催者にお問合せ下さい。

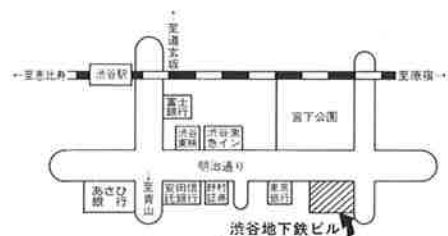
## 多摩川クリーンエイド'94に参加して

4月17日の日曜日、財団後援による多摩川クリーンエイド'94が行われた。今年が多摩川全域44会場で、約17,000人が参加した。昨年はTAMAらいふ21の行事として行われたので財政的な面、協力態勢の面でもととのえられていたが、今年はクリーンエイド事務局企画によるボランティアグループ中心の手弁当による活動であった。実際に蓋を開けるまでは心配なところもあった。しかし、事務局をはじめとする皆様の努力が実り、昨年の51会場、30,000人の参加にはおよばないが、準備期間が短かったわりには、なかなかの健闘ぶりであったと思う。NHKはじめ民放各局のテレビ局の取材もあり、夕方のニュースで放映されていた。翌日の新聞にも報道されていた。われわれ財団の職員も榎本さんひきいる二子玉ネットに参加した。場所は二子玉川の兵庫島である。実際のクリーンアップは11時から12時である。その前に9時半に受け付けを終わると、バードウォッチングが始まった。せたがやトラスト協会の杉浦さんから、スポッティングスコープを覗いて、とても丁寧に、わかりやすい鳥の説明を受けながら観察する。小さき、つぐみ、土鳩、せきれい、はしぶと鳥。四月のさわやかな陽光のなかできらきらと輝いて見えた。丁度この季節は鯉の産卵期でもある。対岸の岸边には30センチ以上の真鯉が群れをなして水面から盛り上がり壮観であった。「のっこみ」という現象だそうである。鳥や魚の生の営みを目の前にはっきりみると、日常、いかに我々が観念的に自然を考えているかよくわかる。最近テレビで自然物の番組が多い、きれいに

整理、編集された映像、決定的な瞬間をとらえたシーン。そういったものに我々は馴らされ過ぎていないだろうか。ほんものの自然は、太陽の光、風のそよぎ、鳥のこえ、草の匂い、水の輝き、そういったものが渾然一体となつてわれわれの感性に訴えかけるものでないだろうか。11時から清掃活動に入り約400人が河川敷や、公園の中をビニール袋にごみを集めてまわった。率直な感想としては、あまりゴミが無く、あっという間に終わってしまったという感じである。公衆道徳が向上したのか、公園管理が徹底したのか定かでない。事務局の小島さんがいわれるようにクリーンエイドを単なるゴミ拾いと考えないで環境問題に取り組むきっかけづくりとし、これからも息の長い活動に行かねばならない。こういう機会でもない多摩川の自然にふれることもあまりない。善いことをしたという満足感以上に多摩川のこちよい光と風は素晴らしかった。来年は、もっと多くの人々に呼びかけて多摩川の自然を満喫してもらいたい。当日は企業の社員がボランティアとして自主的に参加しており、日曜日に家族連れで楽しく一日を過ごしていた。最近コーポレートシチズンシップ—企業も良き市民として行動しなければならない—とよくいわれる。クリーンエイドの活動はまさにその場として最適であると思う。こういう機会に気軽に多摩川に接することはたいへん有益で、得ることも多いのでなかろうか。

芳村重徳

- ・発行日 平成6年6月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125